In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

港町大坂の誕生 ：
日本社会の構造変容と海域アジア

仁木 宏

Citation	往来する都市文化 ：《断片》から探るアジアのネットワーク. pp.13-24
Issue Date	2009-03-17
Type	Research paper
Textversion	Publisher
Right	For personal use only. No other uses without permission. この作品は、「私的使用」や「引用」など、著作権法上認められている適切な方法にかぎり利用できます。その他の利用には、著作権者の事前の許可が必要です。

Self-Archiving by Author
Placed on: Osaka City University

仁木宏. 港町大坂の誕生 ： 日本社会の構造変容と海域アジア. 重点研究「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」「往来する都市文化 ： 《断片》から探るアジアのネットワーク」. 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター, 2009, pp.13-24.
https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/archives/2394 .

港町大坂の誕生
－日本社会の構造変容と海域アジア

仁木 宏

はじめに

岸本美緒は、明末清初は中国史上有数の発展期であるという。それは、16 世紀から 17 世紀にかけて、「近代」への発展を予感させるようなさまざまな事象が中国において堰を切ったように噴出するからであるとする。ここでいう諸事象には、都市経済と長距離商業の発展、富農経営やマニュファクチュアの展開といった経済面の新動向、出版業の隆盛にともなう情報量の拡大、専制政治に対する批判の高まり、心の内面を重視する態度などの思想上、文化上の新潮流もふくまれている。そして、この時代には、既成の体制を乗り越えようとするエネルギーや、社会と個人との関係を問おうとする情熱に満ちた、熱狂的な社会的雰囲気が横溢していたが、それは清代中期になると、商品経済の発展などを除き、鎮静してしまうとしている。

岸本はさらに、16 世紀は世界史的に見ても激動の時代であったとする。国家・地域間の紛争や統合、新興階層の勃興、都市の発達、人と物資の流動化、社会不安と宗教的革新など、共通の事象がヨーロッパでもアジアでも見られたという。では、そうした事象の背景は何か。岸本は、新大陸の豊富な銀に支えられた国際商業の活発化と、それにともなう地域的、階層的緊張の増大をあげる。そして、世界の各地域はそれぞれ独自の方法でこの衝撃を乗り切り、社会の再編成を実現してゆくとしている（以上、岸本・宮嶋博史／世界の歴史 12『明清と李朝の時代』、中公文庫版、2008 年、p.173～175。初出 1998 年）。

銀をめぐる国際商業の活発化については、日本の石見銀山をめぐって、海域アジア史研究のなかでも活発に論じられている。

16 世紀になるとアジア海域にヨーロッパ勢力が進出し、中国人や後期倭寇、やや遅れて日本人などが活発に海上交流に乗り出していったという。その原動力は銀で、新大陸銀や日本銀が交易を加速させた。石見銀山の「開発」に応じて、中国生糸を満載した中国商船の波が銀を求めて日本に押し寄せ、明朝の海禁政策も朝鮮王朝の懐柔策も破綻させた。こうした中国の民間船の母胎が後期倭寇であったとされる。

後期倭寇の構成員は多民族的であった。倭寇の日本側拠点は各地の「唐人町」で、そこには華人の知識人が移住し、貿易活動を盛んにおこなった。瀬戸内海や壱岐・松浦の海賊衆がこれら倭寇集団と同種の行動をとり、連携したという。こうした社会現象を「倭寇的状況」ともよぶ。こうして、倭寇勢力や港市国家など海上交易に基盤を置く勢力が大きく成長し、多民族的で外部に開いた流動性の高い社会が、日本をふくむ、東アジアから東南アジアにかけて広く各地に出現したのである。

16 世紀後半～17 世紀前半、「辺境の自由な無法地帯」の中で新しいタイプの商業＝軍事勢力が簇生し、その競争を勝ち残ったものが次代の新しい秩序を生み出したとされる。日本では統一政権であり、島津氏などにも可能性があったという（以上、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008 年）。

こうした海域アジア史全体を見わたした議論と呼応して、日本史でも豊かな研究成果が生みだされている。それは、外交史や日明・日朝関係史として提示され、倭寇、対馬・琉球などの国際的位置づけが実証的に解明されてきた。

だが、16 世紀の権力・都市や地域社会について研究しているが、これまで如上のような研究にほとんど関与してこなかった筆者には、海域アジアの中で日本の歴史的位置を探ろうとする如上のような研究潮流は、日本史（学界）の中で必ずしも正当な位置づけを与えられていないように思われる。すなわち、それは外交史や、日本にとっては周縁である西海の地域史という「特定の分野」の研究であると評価され、当該期の日本（列島）社会の全体構造論に結びつかないのである。

16 世紀が日本史上まれにみる社会変動の時代であったことは、多くの日本史研究者が実感している。しかし、海域アジア世界のなかでその意味を解こうとしない、考えようとさえしないのが、われわれ「一般の」研究者である。戦国大名や織田・豊臣政権の研究者、地域社会の研究者の大半は、日本という文脈の中でのみの議論に終始し、説明を完結させている。16 世紀、日本各地で確認される地域経済圏の活性化、都市の簇生を、海域アジア世界に共通する社会構造変容の一環とみなす発想は残念ながらもちあわせていない。

しかし、その一方で、16 世紀の日本（列島）における社会変動、中世から近世への移行の理由、背景を国際的契機のみから説明しようする視角はおおかたの日本史研究者には受け入れられないだろうし、またそうした説明は事実とは異なると思う。

筆者は、15 世紀までの日本社会における固有の構造展開の経過があって、16 世紀には日本独自に変容の時代をむかえていたと考える。その上で、そうした変容の背景として、あるいは変容を強く「後押し」した重要な要素として、国際的契機がどのようにかかわっていたのかを積極的に検討する必要があるのではないか。本稿は、そうした視角からするひとつの試論である。

第 1 章では、港町を中心にして、16 世紀における日本社会の構造展開を略述する。地域社会の変化が港町や城下町にどのように作用したか、一応の終着点である豊臣政権期（16 世紀最末期）まで見通す。第 2 章では、そうした地域社会論、社会構造論のひとつのケーススタディとして、近世大坂の成立を論じることとする。第 1 章でみた各地域、各大名ごとの変容を中央政権として「総括」してできあがったのが大坂であることを示したい。

第 1 章　16 世紀にいたる日本社会の構造変容と港町

中世社会の変容と地方政治拠点

日本中世は荘園（公領）制の時代である。列島各地は京都（一部は奈良）に住む荘園領主に分割して領有された。そのため 15 世紀前半まで、地方で収奪された生産物や銭が畿内

に向かって流れてゆく、京都を中心とする求心的な流通構造が列島の大半をおおっていた。

荘園制の基礎をなす村落は、中世前期には散村であったが、14～15 世紀前半までに集村化を遂げる。農業生産の集約化が進み、用水の確保・維持などをめぐる共同性が強まったことが大きな要因と考えられている。富裕な農民の地縁的共同体である「村」が発達し、土豪・地侍などのリーダーと一般村民がまとまって意思を形成した。生産や祭祀のための共同行動をつうじて社会的なつながりが生まれ、村は独自の財政を有し、身分体系を形成した。

15 世紀後半以降には、個々の村が緊密性を高める一方、そうした複数の村々が連合して地域社会を築いていった。大規模な用水路の維持や山野の用益、仏神信仰などが紐帯となり、村々が武力や裁判の面で連帯した。地域社会の結節点として、街道沿いなどの寺社門前や国人（有力在地領主）支配の集落に市庭（いちば）が発達する。市庭は、複数の村落間の交換の場であり、外部から到来する商人がもたらす商品を購入する場であった。

こうして 16 世紀前半までには、重層的な地域社会が市庭や在地寺社などを結び目として広範に展開していった。国家的な制度としての荘園制が弛緩し、衰退してゆく一方で、村や町を基礎単位とする村町（そんちょう）制が地域、国家の新たな基盤として台頭してきたのである。

では、こうした地域社会を支配する権力のシステムはどのようであっただろうか。

中世においては公武（朝廷・幕府）の一国行政の規模は大きくなかった。国主・守護はたいてい京都に居住しており、各国の支配拠点に勤める地方役人の多くは在地領主で、彼らは基本的には本拠地の居館（村の館）で暮らしていた。そのため、地方の問題はしばしば地域社会の中で自律的に解決され、地方政府に訴訟が提起されるとは限らなかった。守護の徴税システムは荘園制に依拠しており、地域支配の権限（「国成敗権」）も将軍の権威（「天下成敗権」）に負うところが大きかった。

このため、国衙・府中にせよ、守護所にせよ、一国支配のための地方政治拠点は都市として発展しなかった。なぜならそれらは強い中心性をもたず、また大きな消費人口を擁しなかったからである。

港町隆盛の理由

日本中世の地域社会において、もっとも規模の大きい都市は港町であった。

荘園の貢納物を集約し、海路を行く船に積み込むための港町には、蔵が建ちならび、都市として発展を遂げていた。こうした港町は寺社が領主である場合が多く、複数の寺社門前（町）の複合によって港町がなりたっていた。港町に出入りする商人の多くは宗教者（神人（じにん）や仏僧）で、中央の大寺社や地方の有力寺社権門に所属することで交易・流通の特権を得ていた。

こうした港町が、早いところで 15 世紀後半から、多くで 16 世紀第 2 四半期から加速度的に発展を遂げてゆく。このことは、この時期前後に開基伝承をもつ寺院が港町で急増することから推測される。寺院の多くは日蓮宗（法華宗）や浄土真宗（一向宗）であった。法華宗は、京都・堺などにみられるように、有力商人の信仰を主に集めており、法華宗寺

院が多いということはその都市に「お金持ち」がたくさんいることの証(あか)しであった。一方、真宗はどちらかといえば中下層の人々の宗派であり、実際、真宗寺院は港町の中でも水際に立地した場合が多い。荷物の上げ下ろしなど、きびしい労働現場で活動した人々の信仰を集めていたのであろう。

都市内の地縁的共同体の成立が推定されるのもこの時期である。都市内の特定の街区をさす町名が記録に見えるようになるが、これは、そうした町を基盤とする、初期的な都市共同体の成立を意味する。都市共同体はそれぞれ一定の自治を特徴とした。こうして限定された都市空間の中で、多数の寺社が櫛比するとともに、住民が地縁的結びつきを強めていたことがわかる。16 世紀中葉には、人口も多く、濃密な都市生活が営まれる港町が誕生していたことになる。

こうした港町発展の背景には、物流の圧倒的増加があったと推量され、それは列島各地で確認される。物流増加の条件は主に地域経済圏の発達によってもたらされたと考えられる。実証することは難しいが、以下のような港町の変化が参考になるだろう。一国内で、15 世紀前半まで繁栄した港町と 15 世紀後半以降に繁栄する港町が異なる場合がある。前者が、港固有の条件（ラグーンの水域、風除けに適したリアス式海岸など）に優れるものの、後背地につづく陸上交通路が発達していないのに対し、後者は、港湾としての条件には多少難があっても、背後に豊かな平野や大きな街道をかかえるなど地域の核となりうる基盤をもっている。すなわち、港町が遠隔地交易だけで存立する時代から、地域経済圏の中心地たるべき時代に遷移したのである。

村や町の共同体の強まり、複数の村・町からなる地域社会の発達は、社会全体がまんべんなく進歩したことを意味するわけではない点に注意すべきである。むしろ特定の中心地が政治、経済、文化・宗教などの諸側面で求心性を高め、やがて規模の大きな都市となってゆく。富と人口が圧倒的に集中していったのは港町であった。海がない国々はどうであろうか。京都にほど近い丹波国でも、信濃国や甲斐国でも 16 世紀末期まで顕著な都市は発達しなかった。わずかに信濃では善光寺門前町が、甲斐では戦国大名武田氏の城下町甲府が目立つ程度である。地域社会の豊かさ、経済の活性化は、とりわけ港町に表れた。

このことは、16 世紀における経済流通の振興、各地における都市の隆盛が、地域社会における内発的な、下からの積み上げだけに因るのではないことを示す。港町の圧倒的かつ急速な繁栄は、それが地域社会の外からやってきたモノや人にも負っていることを明らかにしている。この流通の元には、「はじめに」で取りあげたような海域アジア世界の巨大なモノや文化の流れがあった。そのことは、日本各地の港町遺跡から中国・朝鮮のみならず、時にはベトナムなど東南アジアの陶磁器類が見つかることからも確かめられる。

すなわち、地域社会の変動、地域経済の発展と、国際的な交易の活発化、海の流通量の増大という、出自を異にする二つのベクトルが、各地の港町で接合し、港町の繁栄をもたらしたといえよう。

戦国大名の領国支配と城下町・港町

武家諸権力は、こうした経済・流通の活性化、港町の発達を指をくわえて眺めていただけだったのであろうか。もちろんそうではない、15 世紀後半以降、諸国の守護大名は都市の把握に乗り出してゆく。

15 世紀前半以前、守護所とよばれる一国支配の拠点は、前代の国衙・府中の地を踏襲する場合が多かった。国衙・府中の大半は農村（穀倉）地帯をおさえる地にあり、またしばしば一国の中でも京都への交通至便な地にあった。これは、古代から中世前半の地域支配が、農村支配を中心とし、京都（朝廷）を背景にして展開されたことを象徴的に示している。室町時代（14 世紀中葉～15 世紀中葉）においても、それは変わらなかった。

ところが 15 世紀後半になると、多くの守護が京都から管国に下り、初めて本格的な地域支配を開始する。そして守護所を港町の近くなど、一国の中心地で、交通の要衝である都市の近くに移転する。もはや京都（幕府・将軍）の権威だけで地方支配が可能となる時代ではなく、一国規模で流通を掌握できることが地方政治拠点の必要条件となったのである。

ただ、この段階の大名の支配拠点（守護館と家臣団屋敷）は港町の後背地に設定され、港町は従来の形態を変えることはなかった。武家の空間と旧来の港町部分の合一はなされず、港町が「主」、守護館が「従」の空間構造をとっていた。港町を支配するため代官・奉行などの屋敷が港町内部に個別に設置されたり、港町の有力者（豪商）が御用商人として大名に編成されるなど、武家の権力が港町内部に侵入してきたことはまちがいないが、港町の領主である寺社や、16 世紀になって力をつけてきた都市民（共同体）の自治は、武家権力の支配を容易に受けつけなかったのである。

16 世紀第２四半期になると、戦国大名はその日常的な居所を山城（やまじろ）の山上や山下（さんげ）に移す。これは港町に隣接する居館を維持していた大名も例外ではなく、多くの場合、港町から数キロメートル離れた新たな支配拠点が築かれた。港町を大名居館・家臣団屋敷に一体化させることで城下町に組み込み、支配を貫徹する課題は次の段階に持ち越されたのである。

一方、村や地域社会の力量の高まりは、村のリーダーである土豪の政治的力量を高めた。有力な在地領主は土豪を被官に結集するとともに、地域市場を支配するなどして政治的、経済的な中心核となっていった。そうした在地領主に対する大名の統制も強化されてゆく。こうして武家が全体として集まり、大名権力が求心性を高めてゆく。

すなわち、社会的・経済的な面での地域社会の結びつきの強まりは、一方で政治的・権力的な面での求心化をもたらしたのである。こうして政治的結集核として人と物が集約された城下町は発展を遂げ、16 世紀第３四半期には、港町や寺社門前とならぶ都市としての規模をもち、中心性を獲得した。すなわち、戦国時代最末期にあたるこの段階には、国内に港町、寺社門前、城下町など異種の都市が並列するネットワークが広く展開していたのである。

この時期、東国と西国の間で地域社会構造のちがいが顕著に認められる。西国では、瀬戸内海、九州などで中小規模の港町が簇生するが、武家権力はこれらを必ずしも十分には掌握できないでいた。大規模な城下町を築いた豊後国大友氏の府内（大分市）や周防国大

内氏の山口（山口市）などは、開放的な空間構造を特徴とする。大内氏が朝鮮王族の末裔を名乗るのに対し、大友氏はキリシタンを積極的に受け入れた。

西国の大名や武家権力は城下町を築造して商工業者を囲い込み、自ら育成しなくても、活発な経済流通のなかで商工業者の自律的な動きは十分であったのだろう。それは港町における自治の動向にもつながってゆく。こうした西国の社会、城下町や港町の開放性は、キリシタンの受け入れや、佐伯論文が論及している唐人町の設置が象徴しているように、海域アジア世界との交流の深さに起因しているといえよう。

豊臣大名城下町による港町の併呑

1570 年代、織田信長の政権は、経済流通の活性化によって新たな中心性を高めていた京都を掌握することで、全国を再統一する基盤と正当性を獲得した。そして、信長とその後継者である豊臣（羽柴）秀吉は、政治的・軍事的に諸国の戦国大名を糾合する一方、仏教諸勢力を圧倒し、また村や町などの地縁的共同体を基盤にすえた支配を展開しはじめる。そして、1580 年代以降、統一政権は、戦国大名には克服できなかった港町への挑戦をはじめる。

豊臣政権下の大名は、新たな領地に入部した際、最初は戦国時代の城をそのまま使うが、数年を経ずして新たな城と城下町の建設に入る。城地はたいてい大河の河口部で、中世においては人の住まない低湿地が選ばれた。それ故、周辺に広大な平坦地が確保できた。そこに、大量の人夫を動員して膨大な岩石や土砂を投入して安定した土地を造成し、城下町を築いた。城は、河口部近くに浮かぶ島や三角州のわずかな高まりを利用し、石垣を高く積み上げることでその偉容を造りあげた。こうして、数年前までほとんど人跡未踏の地であった場所に城郭、家臣団屋敷、町屋を築くことによって新しい支配権力の威勢を示したのである。

中世においては在村した「侍」たちを武士身分にすることと引き替えに城下町に住まわせた。有力家臣がそれぞれ構えていた城は城割りによって破壊され、城主（家臣）のみならず、それらの城下の町人の多くも大名の城下町に移住した。城下の町には、この他、周辺の中小都市の商人が半ば強制的に移転させられたが、それだけでなく領国内の農村から多くの民衆が移り住んだと考えられている。河口部に建設されたことから予想されるように、これらの城下町は港町をその一部として組み込んでいる。両者は完全に一体化され、大名権力の支配が港町に貫徹しているのである。

こうして政治都市の求心性と、経済都市である港町の中心性を統合した豊臣大名の城下町は、従来のその都市を圧倒的に凌駕する人工大都市としてその姿をあらわしたのである。こうした城下町による地域統合は 17 世紀第 1 四半期まで突き進められたといえよう。

第２章　大阪湾岸の港町と豊臣期大坂

戦国時代の兵庫津、尼崎、堺

首都京都は内陸の都市であるため、京都を目指して海路をやってきた物資はどこかで陸揚げする必要がある。この、京都への入口は三つあった。一つは、東国・東海方面からの物資が到達する伊勢国安濃津・桑名で、ここからは八風越・千草越などを経て近江に入り、京都へいたる。第二の入口は若狭国小浜・敦賀で、山陰の物資は小浜に、北陸の物資は敦賀に主に着岸したといわれる。そこからそれぞれ陸路で琵琶湖岸に出ると、琵琶湖を水上輸送され、京都に搬入された。

３番目の入口が大阪湾岸の淀川河口部であるが、ここが物資の質・量ともに圧倒的であったと思われる。なぜなら、九州や瀬戸内海沿岸部はもちろん、博多以遠の大陸や朝鮮半島、琉球からの物資はいずれも瀬戸内海を東進してきて大阪湾にいたる。それだけでなく、土佐沖や紀伊半島沖の太平洋を回ってきた物資や阿波国の物資などが紀淡海峡をぬけてやはり大阪湾に入ってくるからである。

これらの物資を受けとめる港町として、摂津国兵庫、尼崎と、摂津・和泉国境の堺が発達した。このうち兵庫津（神戸市）が最も早く発展した。12 世紀後半には、日宋貿易に乗り出した平清盛が大輪田泊＝兵庫津を造築し、15 世紀には「兵庫北関入舩納帳」で知られるように大量の船が入港していた。南方に突き出る和田岬によって風波が静かな海域が出現し、天然の良港であった。

日明貿易を担った大内氏と結びついて発展した兵庫津であったが、15 世紀末以降、明船の寄港地は堺に移り、兵庫津は衰退した、というのが通説である。たしかに、大阪湾内の中心港湾の地位は堺や後述する尼崎に奪われる。しかし、それは国際貿易の地位低下によるというよりも、兵庫津が有力な後背地を擁していなかったからであろう。六甲の山並みが迫る兵庫津に対して、尼崎と堺は大阪平野の一画に位置していた。「港町が遠隔地交易だけで存続する時代から、地域経済圏の中心地たるべき時代に遷移した」のである。

但し、16 世紀の兵庫津が実際には衰退したわけでないことは、発掘調査や絵図の描写から確かめられる。やがて岡方、北浜、南浜という地縁的な結びつきも内部に生まれ、16 世紀末にむけて加速度的に発展を遂げていたことは他の大阪湾岸の港町と同じであった。荒木村重の反乱に与同して織田信長に対抗したこともあった。

尼崎（尼崎市）は神崎川河口部に発達した港町である。後述するように、8 世紀、神崎川と淀川を結ぶバイパス水路ができて以降、神崎川河口部に港町が次々と発達した。瀬戸内海を東進してきた海船から淀川をさかのぼる川船へ荷物を積み替えるための中継地である。しかし、神崎川や猪名川が運んできた土砂が堆積し、河口は徐々に海側へ押し出されていった。そして 14 世紀以降、尼崎・大物（だいもつ）が卓越した港町としての地位を確立してゆく。

16 世紀、淀川（木津川）河口部が再び開き、大型船が大坂方面に回航するようになる（後述）と、尼崎の前代以来の地位は揺らいだ。しかし、尼崎は後背の西摂津地域の中心港湾となっており、その発展がとどまることはなかった。この頃には、尼崎（狭義）地区（南

部地区）には法華宗（寺院）の進出が著しく、また大物地区（北部地区）では浄土真宗の道場が中核施設となっていった。港湾は、両地区の間にはさまれた水域に発達したと推測される。

惣社貴布祢社を中心とする惣中（都市共同体）の活動も確認され、織田信長の税徴収に対しては武力で抵抗したため「四町」が焼き討ちにされた（『細川両家記』）。また荒木村重の反乱にあたっては村重方に与した。

堺は、15 世紀後半以降、顕著な発展を遂げはじめる。日明貿易の主導権が兵庫津から堺に遷移したことがその理由とされることが多いが、この時期は全国的に見て港町が発展しはじめる時期であり、国際貿易の影響力だけから説明することは誤りである。16 世紀になれば、堺が大阪湾内で第一の港町になり、首都京都につぐ人口を誇るようになる。

砂堆上を縦貫する熊野街道と、それに交差する大小路を中心に町並みが発達した。「泉南仏国」とよばれるほど多数の寺院が林立し、それら寺院の境内・門前の集合が都市堺の実態であった。16 世紀前半には、会合（かいごう）衆とよばれる国際貿易商人が「有徳人」として市政を牛耳ったと一般にはされているが、やがて開口神社などを中心に地縁的な都市共同体が発達し、16 世紀後半にはこれら地縁的な共同体が堺を代表するようになった。

ところで、このように発達した堺であるが、港湾としてはすぐれた特徴をもっていない。堺は大河川の河口部に位置していないし、ラグーンにともなう大規模な湾入部もない。町場は砂堆上に位置し、その西側には長い砂浜がつづくばかりである。そのため、大型船は直接堺に進入することはできず、おそらく艀（はしけ）を使って荷揚げ、荷下ろしをしていたのであろう。大型船が安全に停泊・避難できるような風待ち、風除けの地形構造を欠いていたことになる。

このように良港とは全くいえない堺が発達したのはなぜか。それは遠方に延びる複数の街道の存在から説明される。堺から東に向かって竹内街道（街道名称は近世になってからのもの。他の街道も同じ）、長尾街道の２本の主要道がのび、南河内の村々から大和国まで結んでいた。これらと国分・古市付近（柏原市・羽曳野市）で交差する東高野街道は生駒山西麓を北上して中河内・北河内から山城国八幡（石清水八幡宮門前）へ出る。そこから淀、鳥羽と渡れば京都は指呼の間である。

堺から南東にむかう西高野街道は南河内の村々を結び、南へ向かう熊野街道は和泉を縦断する。こうして堺は、大阪平野中南部の豊かな村々のみならず、遠く紀伊・大和国まで後背地とする条件を備えていた。すなわち、堺は国際貿易港であると同時に、巨大な地域経済圏の中心、陸路の起点であったからこそ港町として発達したのである。

中世大坂における都市の発達

古代（7～8 世紀）において、上町台地北端部上に立地した難波宮は、その外港である難波津をその西下に擁していた。難波宮廃絶後、これは渡辺津という港町となり、中世を通じて存続した。

上町台地北端の北側には大河が流れていた。一つは山城国から流れ下ってくる淀川であ

る。もう一つは大和川であった。18 世紀以降、大和川は現在の川筋に付け替えられたが、古代・中世の大和川は河内国内を乱流し（「河内」という国名がその状況をよく説明している）、上町台地北端部で再び集まって淀川と合流して大阪湾に流れ出ていたのである。

淀川と大和川が運ぶ土砂はやがて河口部の水深を浅くし、船の操舵は困難となり（「難波」「浪速」といった地名の由来カ）、ついには中型船さえも河口部を遡上できなくなった。瀬戸内海を航行してきた海船から積み荷を川船に積み替え、淀川をさかのぼって首都京都に運び込むためには異なるルート・港湾の開拓が必要となったのである。こうして 8 世紀、神崎川と淀川を結ぶバイパス水路が切り開かれ、瀬戸内の船は神崎川河口に向かうようになった。渡辺津は、上町台地上の陸路と、より上流の淀川・大和川流域を結ぶ機能をもつだけの港町になった。

上町台地を北端部から約４キロメートル南下した所に位置する四天王寺も中世においては地域の中心地の一つであり、その門前には「七千間（軒）在所」（『大乗院寺社雑事記』）といわれる町場が生成した。町は、四天王寺の西門前に発達し、街道はそこから上町台地を西へ下り、今宮社・門前をへて木津浦にいたる。ここは淀川（木津川）の河口部にあたる海港である。

15 世紀後半、本願寺の蓮如は、近畿地方から北陸・東海・瀬戸内地方にかけて浄土真宗の教線を爆発的にひろげた。民衆を支持基盤とする真宗の教えは、農民・町人勢力の台頭と相まって広く受け入れられた。その蓮如が上町台地最北端の台地上に大坂御坊（一般的には「石山本願寺」）を開いた。16 世紀第２四半期、ここが本願寺の本山となってからは爆発的に発展し、御坊の周囲に寺内町が展開した。ここには全国の門徒が参詣に訪れると同時に、大坂は摂津・河内門徒の結集核となった。

当時、摂津・河内には多くの寺内町が分布し、それぞれが周辺村落で布教を重ねていた。こうして大坂を頂点として、衛星都市の如くひろがる寺内町、さらには周辺農村へとネットワークが広がり、深まっていったのである。これは単に宗教面のみならず、経済的、政治的なつながりでもあった。政・経・宗三位一体のネットワークが大坂を頂点にとり結ばれたのである（大坂を唯一の頂点とするものであり、ネットワークというよりヒエラルキーとよぶべきかもしれない）。都市間の結びつきを実現したことは、京都・堺をはじめとする、他の都市にはなかったことである。

16 世紀第 2 四半期、再び淀川（木津川）の河口部が開き、海船が大坂付近まで遡上できるようになった。これは、堺に停泊していた「唐船」（中国船か、中国交易にあたる日本船か不明）が大坂の「寺内之浦」まで回航していることから確認される（『証如上人日記』）。急に自然条件が変わったとも思えず、本願寺がその技術力と労働力を駆使して河口部を浚渫したのではなかろうか。

この時期の大坂の地勢を的確に描いているのが、次の記事である。

抑も大坂は凡そ日本一の境地なり。其子細は、奈良・堺・京都に程近く、殊更、淀・鳥羽より大坂城戸口まで舟の通ひ直にして、四方に節所を拘へ、北は賀茂川・白川・桂川・淀・宇治川の大河の流れ幾重共なく、二里・三里の内、中津川・吹田川・江口川・神崎川引き廻らし、東南は尼上が嵩・立田山・生駒山・

飯盛山の遠山の景気を見送り、麓は道明寺川・大和川の流に新ひらきの淵、立田の谷口流れ合ひ、大坂の腰まで三里・四里の間、江と川とつゞひて渺々と引きまはし、西は滄海漫々として、日本の地は申すに及ばず、唐土・高麗・南蛮の舟海上に出入り、五畿七道集りて売買利潤富貴の湊なり。隣国の門家馳集り、加賀国より城作を召寄せ、方八町に相構へ、真中に高き地形あり、爰に一派水上の御堂をこう／＼と建立し、前には池水を湛、一蓮托生の蓮を生じ、後には弘誓の舟をうかべ、仏前に光明ヲ輝、利劔即是ノ名号ハ煩悩ノ怨敵ヲ治シ、仏法繁昌の霊地に在家を立て、甍を並べ、軒を継ぎ、福祐の煙厚く、偏此法を尊み、遠国波嶋より日夜朝暮仏詣の輩道に絶えず。　（『信長公記』巻十三）

この記事を載せるのが、織田信長の事績を記す軍記である『信長公記』であることから、これは信長の大坂観であったといえよう。当時、信長は近江国安土城（滋賀県安土町）に本拠を置いていたが、次なる拠点として大坂を想定していたと思われる。本願寺を大坂から退去させてから２年後（1582 年）、信長が本能寺の変で横死したため、信長の意図は豊臣（羽柴）秀吉に受けつがれることになる。

大坂城下町と港湾

豊臣秀吉は、大坂本願寺・寺内町の跡地に大坂城を築き、それと従来の渡辺津や四天王寺・門前をつなぐことで初期城下町をかたちづくった（『イエズス会日本年報』ほか）。

16 世紀の渡辺津は、のちに東横堀川に整備される部分に残っていたラグーンの水域や、のちに道修町になるあたりに入り込んでいた水域などを港湾として利用していた。これがそのまま「浜の町」（大坂浜、『輝元公御上洛日記』）として城下町に組み込まれていったのであろう。この他、かつての「寺内之浦」を継承する直轄港が大坂城に近いあたり（天満橋南詰付近？）にあっただろうが、全体としてこの段階の大坂の港湾設備は十分とはいえない。大坂城から四天王寺にかけてのびた城下町（平野町）は、堺にまでつなげる予定であるといわれており、はじめ秀吉は堺を大坂の外港として積極的に位置づける意図をもっていた（『新修大阪市史』第 3 巻、1989 年）。

ところが、秀吉は晩年、大規模な城下町改造をおこなう（慶長 3 年（1598）前後）。大坂城の南側に、京都の伏見城下にあった大名屋敷を移させて三の丸とし、それまでそこにあった大量の町屋を東横堀川の西側に移したのである。そこはかつての砂堆で、複雑な地形を呈しており、一部には水域も広がっていた。そこに大量の土砂を投入して安定した平面を造成し、「長く真直ぐな道路で区分けした代替地が与えられた」（『日本西教史』）。こうしてのちに「船場（せんば）」とよばれる街区ができあがった。船場の北端で大川に面する「浜の町」は「材木浜」としてさらに西に広がり、下船場にまで到達した。船場の東側には南北に流れる東横堀川が整備され、それが西に向かって流れる道頓堀川が掘られた。これらの水域が、淀川側から、あるいは大阪湾方面から船が進入してくる港湾施設となった。

大坂城下町について、慶長 12 年（1607）の朝鮮使節団の記録には、「河を引き渠を通じて、虹橋処々、船舶充満せり」（『慶七松海槎録』）とあり、同時期のキリシタン宣教師の記録には、「当地は日本国中最も立派なる所にして人口は二十万あり。海水其家屋に波打つが故に、非常に潤沢に海陸の賜物を具有せり。」（『日本見聞録』）と記す。船場の整備

は、大坂の外港として堺を重視する政策の放棄を意味する。国際貿易船をはじめ大型の船を直接、城下町中心部まで引き入れ、権力の膝下で荷物の積み下ろしをさせることになったのである。

豊臣政権下、大坂から京都へ向かう京街道（淀川左岸堤防上）や、吹田・尼崎方面をむすぶ陸路が整備されたと推測される。また中河内の低湿地帯を横断した奈良街道が大和へ直通するようになった。これまで大阪平野南部の陸路のターミナルは堺であったのが、平野のより中心部に立地する大坂が新たな核となってその地位を奪っていったのである。こうして政権の首都として加速度的に人口が増えた大坂は堺を凌駕してゆく。

秀吉は、天皇や五山寺院を大坂に移転させる計画こそ失敗したが、1598 年には諸国の大名の屋敷を大坂城下に集め、武家の首都としての大坂の地位を不動のものにした。豊臣政権に服属した諸国の大名は、豊臣大名マニュアルとでもいうべき統一した支配施策をそれぞれの管国で実施することを迫られた。これは、石垣の積み方（城の造り方）にはじまり、官僚組織や文書形式、果ては茶文化の導入にまでいたるものである。各大名は、いまだ戦国時代の遺風を残し、家臣団や領国統制に苦心する場面にしばしば直面したが、このマニュアルどおりの支配を貫徹することで、中央権力である豊臣氏の威光を戴き、強力な領国統制を可能とすることができた。

第 1 章で、豊臣政権下の大名が港町と一体化した、圧倒的に巨大な城下町をつくり、強力に領国統制するようになると述べた。多くの大名に共通するこうした姿も、豊臣大名マニュアルに従うものである。そしてその頂点に立つ大坂はマニュアルの手本となるべく、国際貿易港にして、強力な自治都市であった堺を「否定」し、自前で港町を創出して、一体的な城下町である大坂を作りあげた。

こうして港町大坂が誕生した。

おわりに

本稿で述べてきたことをまとめておく。

日本（列島）において、15 世紀後半から徐々に加速度をつけ始めた構造変化は、社会の結びつきの強化となってあらわれ、村や町という地縁的な共同体の生成・強化に結果する。地域にたくわえられた力量は、経済の活性化をもたらすとともに、中心地である少数の都市へのモノ・人の集中、都市の卓越化を招来した。16 世紀初頭までにいち早く卓越したのが港町であった。地域経済圏の中核であると同時に、地域と「外の世界」の結節点にあたる港町がこの時期、急激な変貌をとげる点に海域アジア世界の変動の影響を認めることができる。そしてその影響は港町から地域社会に広がったであろう。

社会の結びつきの強化は、一方で地域社会に基盤を置く武家の統合、権力集中をももたらした。16 世紀第 2 四半期以降、戦国大名が家臣団や商工業者を城下に集めるようになると、城下町は港町や寺社門前などと並んで地域における中心地として機能してゆく。ただ、東国にくらべて西国の方が、城下町がより開放的で、港町への統制がゆるやかである点に、やはり海域アジア世界の影響を認めることができよう。

1580 年代、京都を掌握することで中央権力となった豊臣政権は、社会の結びつきをさらに強化するため村・町を支配基盤とするとともに、武家権力のいっそうの集中を果たし、天下統一を実現する。その際、港町を内部に取り込むことで大名の支配は港湾にまで貫徹し、城下町は地域社会における孤高の中心核となりえた。

大阪平野においては、15 世紀末以降の尼崎や堺が先述したような港町の展開過程を示す。とりわけ堺は国際貿易港であり、キリシタンの来住に象徴されるように、その発展は海域アジア世界の変動と直結するものであった。堺が卓越した自治都市であったことも同じ文脈から説明できる。統一権力はこれに大坂を対置した。16 世紀末期における大坂の優位性獲得は、地形環境の変化など、大阪平野全体の地勢の中で説明できる。しかし、一方で、天下統一を果たした豊臣政権が最終的にそこを武家の首都とし、独自の港町開発をしたことが大きな意味をもっていた。

以上、あくまで試論であるが、日本（列島）固有の社会変動のあり方と、海域アジア世界に共通する社会構造変容が、16 世紀の日本社会にどのように顕現し、相互に切り結んで次の時代につながってゆくのか略述した。

地域社会のあり方が内部の動揺のみならず外部世界とのかかわりの中で変化するのはあたりまえである。しかし、前近代日本の歴史を通してみた時、この時期ほど、国際的契機が大きな影響を与えたタイミングは他にない。16 世紀第２四半期から第３四半期の西国のいくつかの港町をみた時、キリシタン宣教師が述べた通り、そこに中世イタリアの海洋都市国家や北欧のハンザ都市に類似した性格を認めることもあながち誤りではなかろう。しかし、日本社会はそれ以前から起こっていた地縁性の強化とそれにともなう権力集中をいっそう押し進める道を採り、統一政権の成立に結果した。大坂はそうして生まれた都市である。

こうして日本では、港町は「都市国家」とならず、「国家の都市」として位置づけられることになった。従来、日本の都市史では、都市自治が「多」とされ、上記の変化を負の側面で描きがちであったが、中世と近世における港町の役割のちがいとして評価すべきであろう。

桜井英治は、12～15 世紀（日本の中世）の東アジアにおいては、中国との距離、中国の脅威の強弱が国制のデザインを決定したとする。朝鮮やベトナムは中国と隣接するがゆえに絶えず対外的緊張にさらされ、中央集権的な軍事態勢、大規模な中央財政を必要とし、自前の貨幣発行にいたる。一方、中国から遠いジャワや日本は警戒心が薄く、貨幣をはじめ中国製品を使うことに無神経であったとしている（桜井「これからの中世史研究－比較史および経済史の視点から－」『歴史科学』194、2008 年）。こうした視角と、16 世紀の海域アジア世界論はどのように関係するのであろうか。

また、本稿では、豊臣政権まで見通しながら文禄・慶長の役（朝鮮侵略）について触れるところがなかった。さらに 17 世紀前半まで朱印船貿易がつづき、その後、日本は「鎖国」の時代を迎える。これら、16 世紀に前後する時代もふくめて、日本社会の構造と東アジアレベルの国際関係の推移を検証してゆく必要があるだろう。